

福岡県立修猷館高等学校への「出前授業」

「国連ハビタットの活動とグローバリゼーション」

日時：2010年11月3日

場所：福岡県立修猷館高等学校講堂

国連ハビタット福岡本部長 野田 順康

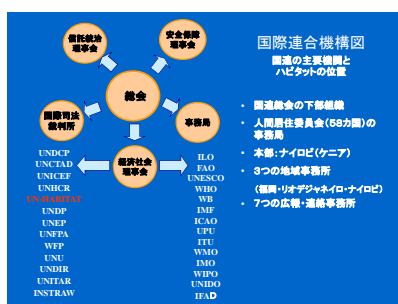
国連ハビタットの野田でございます。今日は文化の日ということで皆さん本当はお休みなのに、こういう講演会をされるということで、勉強以外の活動も盛んなのだなと思っています。せっかくのお休みにこうやって朝の早い時間から出席をしていただいているわけですから、何かひとつでも心に残るような話ができればいいなと思います。

今日の演題は、「国連ハビタットの活動とグローバリゼーション」。私の記憶では、今から3年位前にも修猷館でお話をさせていただいたことがあります。3年前にいろいろ話した中で皆さんが感想としてお持ちになったのは、日本で考えている日本の存在と、海外から見た日本の存在というもののギャップがこんなに大きいのかということをお話からお感じになったようです。そのような感想文が非常に多かったです。それからもうすでに3年以上経つのだと思いますけれども、事態はもっと深刻になっています。3年前はまだそういう世界から見た日本というものと、日本人が考える日本というもののギャップがそんなに大きいのかとびっくりする程度でしたが、今やもうそういう状況でもありませんね。3年前に私が中国の隆盛の話とかいうようなことをいろんな所で講演した頃には、まだ一般の方々には「中国は伸びているけれどもソフトはダメなのだよ」なんてことを言っていましたけれども、今やもう日本のソフトも中国と勝負して、なかなか勝ち抜けない、そんな状況まで来ているということでもあります。

前回、私は安全保障の話もいろいろいたしましたけれども、どうですか皆さん。尖閣列島、それから北方領土の問題、ここまでヒートアップしている話は、皆さんにとってはびっくりしたということなのかもしれませんが、私は昭和54年、1979年に総理府の国土庁という所に入って日本の国土計画を作ってきたわけですが、昭和54年頃に既にこの領土問題を我々は徹底的に議論したのです。尖閣列島、北方領土、それから沖ノ鳥島等が、我が国固有の領土であることをどのように明らかにするかということを中心に議論していたわけです。それからもう30年以上経つたのですけれども、残念ながら我々の議論にもかかわらず、ちゃんとした対応が取れなかったというのが、この尖閣列島と北方領土問題に非常に明確に現れてきているなと思っています。私が言っているのは、3年前と比べても非常にドラスティックに世の中は変わっているし、日本は本当に窮地に追い込まれているというのが今の現状ではないかと申し上げているのです。まずちょっとイントロダクションですけどね。

今日はそのような状況を反映して、3年前と比較すると話す内容は相当に変わっています。今日の話は、国際連合については、皆さん勉強されているということなので、さらっとお話をして、グローバル化の問題と、そういうグローバル化の中で日本はどうかという2点について、力点を置いて話していきたいと思います。

国際連合については皆さんよくご存じだと思います。第二次世界大戦の後、不戦の願いを込めて、1945年にサンフランシスコ条約で国際連合を創ったわけでありまして。平和と安全、友好関係、基本的人権という3点に重きを置いて創設したわけでありましてけれども、1945年設立当時は、51カ国の加盟国でありました。今の時点で192カ国となっています。私の記憶が正しければ今の世界の国の数は212だったと思います。したがってほとんどの国が加盟をしているということでありまして、やはり世界の中の協議の場として国際連合というのは非常に重要な役割を果たしているのだと思います。ここに国際連合ができてからの事務総長がずらっと並んでいますね。ノルウェー、スウェーデン、ミャンマー、オーストラリア、ペルー、エジプト、ガーナ、韓国。皆さんどう思われますかね、この国を考えて。決して安全保障理事国の五大国は、国連事務総長は出してきません。それから第二次世界大戦の敗戦国。それはドイツ、イタリア、日本でありますけれども、この3カ国から国連事務総長を出すことはあり得ませんね。それくらい第二次世界大戦の影響というのは未だに続いているということでもあります。現在の事務総長は韓国のバン・ギムンでありますけれども、比較的中規模国でニュートラルな国から国連事務総長を出してきているというのがこれまでの事務総長選出の経緯であります。日本人の人的貢献、はっきり言いますと、国連に対する日本人の貢献は薄いというのが現状であります。もちろん皆さんご存じの緒方貞子さんとか、日本人の国連職員として先端的に国連で戦後活躍してきた明石さんとかいろいろおられますけれども、後の数字でも出て来るように、日本人の貢献は薄いです。



これは国連の基本的な構図です。先ほど先生からニューヨークにも行かれるとお話がありました。国連総会がニューヨークで毎年9月の第二火曜日からスタートします。その総会を支える事務局もニューヨークにありますし、それから国連の中で最もパワフルといわれる安全保障委員会。これは5つのパーマネントメンバー、アメリカ、イギリス、フラ

ンス、中国、ロシアですね。この五大国というのはいわゆるベトーといいまして、拒否権というものを発動することができるわけです。ですから非常に重要な問題があって、みんな合意をしようとしても、五大国の一角でそれを拒否すれば、その決議案は通らないというスーパーパワーを持っている。それが安全保障理事会の常任 5 カ国であります。それからその常任理事国以外に、10 カ国の非常任理事国というのがあります。この非常任理事国は一応会議の席には座れます。今も日本は非常任理事国だと思いますが、なぜ日本がどうしても常任理事国にこだわるかというと、この非常任理事国というのは改選があって、ずっとやれるわけじゃないんです。日本も非常任理事国から外れる時があります。そうすると大変です。日本は一応大国ですから、国際政治に影響力を持ちたいと思うのですが、安全保障理事会に入ることもできません。日本政府代表部の職員が会議の会場の外で待っているのです。会議が終わると、どんな会議でどんな内容を話したのか聞きとるのです。なんとしても常任理事国になりたいというのが日本の願望なのだと思います。

それから安全保障理事会以外にも信託統治理事会。これはもう既に機能していません。これは第二次世界大戦が終わった後、政府機能を果たしていないような所で、国連が代わりに統治をしてきたというところであります。もう機能的には停止をしています。

一方国際司法裁判所、これはますます重要になってきています。これは後から申し上げますけれども、いろんな紛争問題を解決するのがこの国際司法裁判所でありまして、例えばこの日本の北方領土とか、尖閣列島の問題もどうしようもなくなったら、これはもう国際司法裁判所に訴えて調停してもらいしかもう手がないでしょうね。したがってこの国際司法裁判所の役割というのはどんどん重要になってきているという風に私は思っています。

それからもう1つ重要なファンクションとして経済社会理事会があります。これはニューヨークではなくてジュネーブで総会を開きます。この経済社会理事会の下にいろんな専門機関というものがついていまして、例えば皆さんが知っておられる機関ではユニセフという組織がありますね、国連児童基金だったですか。そういう組織でありますとか、国連難民高等弁務官事務所。これは緒方貞子さんが事務局長をやっていたわけですが、それと並びで私共の国連ハビタット、UN-HABITAT という組織もあるわけです。経済社会理事会の下にそういった機関がずらっと並んでいます。



これは国連総会、それから安全保障理事会の写真であります。ぜひ皆さんニューヨークの国連ビル、ここの国連総会の議場だけは行って見た方がいいと思いますね。やっぱり独特のムードを持った部屋でありまして、ぜひニューヨークに行かれた場合には総会の議場を見てきて欲しいと思います。安全保障理事会、ここは入れません。閉鎖された 15 カ国だけの議論がここで進んでいるということでもあります。

次に国連の現状ということで予算と職員の話であります。通常予算はわずか 13 億ドル、1,300 億円と、平和維持活動、これは PKO です、いろんな戦争をやっている所に調停をするために国連軍を送っているわけですが、その額にしてもたかだか 1,500 億とかそんなものです。この予算はいわゆるレギュラーバジェット、通常予算です。これ以外にいろんなプロジェクトに援助国がお金をつけてくれるわけです。これが大きいのです。これが大体年間 10 兆円ぐらいの予算を持っていて、これを使って世界各国でプロジェクトをやっているということでもあります。それから職員。先ほど日本人の貢献の話をしましたけれども、いわゆる国連事務局、国連本部の事務局という意味ですが、その事務局員の総数が私なんかも含めて 15,000 人いるわけです。この 15,000 人の中で日本人はどれくらいだと思いますか。今 112 名ですね。これはとても少ない。日本の国連への分担金といわれる額は大体 12.5% でありますから、単純に考えれば 10%、1,500 人の日本人職員がいてもおかしくはないのでありますけれども、わずか 112 人。現在の私のポジションは D ポジションです。国連専門職員の中でもまず P ポジション、プロフェッショナルポジションというのがあって、その上に D ポジション、ダイレクターというポジションがあります。このダイレクターの上にはいわゆる国連事務次長でありますとか、国連事務総長という人達があります。これはもう政治任用として、選挙で選ばれてくる人達です。私クラスのダイレクター以上の日本人国連職員の数というのは、今大体 20 名ぐらいですね。いかに日本人の国連に対する影響力がないかということでもあります。

その他、世界銀行でありますとかアジア開発銀行、それから ILO (世界労働機関) ですとか、WHO (世界保健機構) といった所にまだ 45,000 人専門職員がいるので

すけれども、この 45,000 人の中でやっぱり日本人職員が 500 名くらいですね。ですから国連ファミリー、国連全体で今日本人が大体 600 という数字です。いかに日本人が少ないかということでもあります。



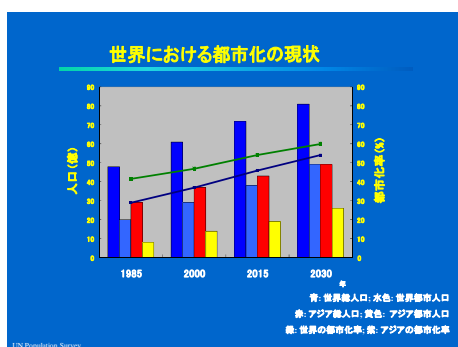
ここに国連の主な活動分野、平和と安全保障から国際法まで大体 6 分野くらいに分かれているのです。特に第二次世界大戦が終わった直後というのは比較的経済開発というところに重点が置かれたので、経済社会開発事業はニューヨークベースで活動が進んでいったわけでありまして、今はやはり戦争問題にシフトしています。紛争問題として非常に大きな問題になってきて、この中でいくと人道問題。それからもう 1 つはよく世の中で言われている気候変動問題。特に過去 10 年、2000 年に入って国連の活動分野は変わってきています。

国連ハビタットはの中で経済社会開発から地球環境、人道問題の 3 分野をカバーして活動しています。2000 年の初めに国連で、ここに書いてありますようにミレニアム・ディベロップメント・ゴールという開発目標を立てていまして、全部で 8 つだったと思いますけれども、特に 1 番最初の貧困の削減というところに重点が当然置かれているわけでありまして、貧困削減もなかなか進んでいません。例えばアジア全体を見て、アジアは急速に経済成長をしているわけですが、貧困者の総数は減少しておりますけれども、都市部においては貧困者数の総数は増加していると、こういう状態が続いております。なかなか貧困の撲滅ができていない。特にアジアの場合には、アジア全体でこそ経済成長をしていますけれども、いわゆる貧困層と富裕層、それから地方と都市部の格差は拡大する方向にありまして、「富める者はより富める。貧しい者はいつまでも貧しい」こういう状態が続いております。なかなかこの貧困削減がうまくいかないという状況にあります。

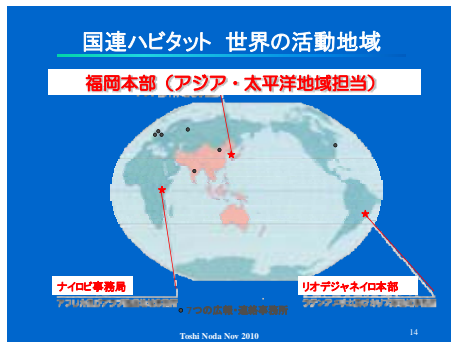
ハビタットはの中で持続可能な環境の確保という問題に取り組んでいます。特に飲料水については、今世界で 12 億人くらいが衛生的な水が飲めないと言われております。2015 年までにその割合を半減させたいというのが我々の目標であります。それからスラム居住者というのがやっぱり今大体 11 億から 12 億人くらい世界にいます。2020 年までになんとかその内の 1 億人くらいをスラムから脱出させたいと

というのが我々の目標であります。この最後のスラム問題については大体目標は達成できるのではないかと考えているところです。

我々はスラムに住んでいる全ての人に、できるだけ適切な住宅を供給するということを目的としております。その供給の仕方としては住民参加型で行います。日本だと建築会社さんが住宅を建てて、住宅のマーケットがあってそれを人が買うという構造ですね。だから日本の住宅というのは平均的に1軒1,000万、1,500万というような値段がするわけです。我々は発展途上国で住民自身に住宅を建てさせるものですから、アフガニスタンで大体1軒10万円で60平米くらいの家を建てていますし、コロンボ、スリランカなんかでも大体3,000ドルから5,000ドル、まあ50万円くらい。インドネシアでも1件80万円くらい。これで立派な家を建てている。そういうのが我々の仕事の仕方です。



ここに世界の都市化の状況というのを御覧に入れています。最初にその人口を見てもらえればよいと思います。1950年は世界の総人口でたかだか30億弱ですね。それからここにありますように1985年、もう50億近くにまで迫ってまいりました。2000年に63億、それから2030年は大体83億という推計ですね。ということは2000年から2030年の間に大体20億人くらい人口が増加する。この増加する20億人の内の95%までが発展途上国で増加をする。さらにそれが貧困層で増加する。こういう状態でありますから世界の都市化というのは発展途上国のスラム、これを爆発的に増加させるという問題でありまして、我々にとって都市問題の中でも特に重要なことが、このスラムをどうやって改善していくかということでもあります。それから都市化についてはネガティブな側面もいっぱいありますけれども、やっぱりポジティブに考えなくてはいけない部分もあります。都市というのは成長のエンジンという考え方をしています。やはり都市が経済的に活動を強化することによって国全体を富ませていくのだという、肯定的な側面も考えながらやっていかないと考えています。



それから少し私共ハビタットの構造をお話しますが、我々はケニアのナイロビ、ラテンアメリカのリオ、それから福岡に地域本部を構えています。福岡からはアジア太平洋全体で大体 28 ヶ国。それから太平洋の小さな島を入れるのだったら 41 カ国くらいのエリアをこの福岡から統括をしています。なんで福岡にあるのかというと、まず国際的に勝ち抜いて日本に誘致することになった後、62 の都市がこのハビタットの地域本部を誘致したいと競争しました。最終的に東京、横浜、神戸、福岡が残りました。その後、麻生知事や麻生太郎さんが積極的に活動されて、福岡に来たというような経緯があります。ただ日本にオフィスを置くというのは非常にコストがかかりまして、職員の給料も高いし、なかなか福岡本部の人数を増やすことができないというのが現状であります。我々地域本部としては大体 50 から 60 人くらいの職員数が必要なのですが、そこまで職員を福岡に置くことができないので、一部はバンコクのオフィスに貼り付けていますし、その他は私共の下に現在現地事務所が 94 くらいありますので、そういう現地事務所に職員を貼り付けて、分散政策をとりながら活動しています。94 の現地事務所に今大体 2,000 人位が勤務しています。

現在の総予算は 260 億円くらいの予算で事業を実施しており、81 プロジェクトがあります。中でもここにちょっとありますように、アフガニスタンのウェイトがものすごく大きいのです。アフガニスタンは我々の場合、1979 年にアフガニスタンからソビエトが退去してから、1982 年には現地事務所を持っていました。いわゆるタリバンの時代もずっと事業をやってきたということで、いろんな建設事業をやってきたものですから、今アフガニスタンの中の国連機関で建設事業をやれるのはうちのオフィスくらいしかありません。したがってドナーがうちのオフィスに多額の拠出をしてくるものですから、どうしてもこのアフガニスタンの予算が大きくなってしまいます。ただバングラディッシュも大きいですし、スリランカですとかパキスタン、それからミャンマーですとかモンゴル、こういった所では比較的大きな建設事業をやっています。その他の国の予算は比較的小さいですが、これは政府の政策顧問的な仕事をやっているもので、それほど予算規模は大きくないということであ

ります。それから中国につきましても本当に格差が大きくて、中国の大都市というのはもう先進国と変わりません。したがって中国の場合には、中国の地方自治体から拠出金をもらって事業をやっているということであります。中国でも5つの都市で現在プロジェクトが進行しております。



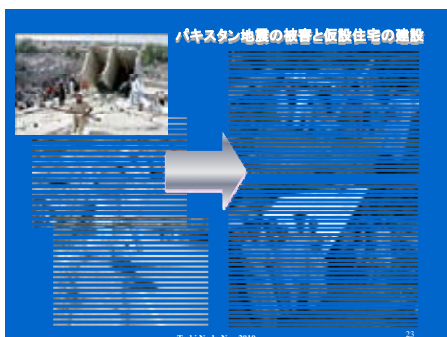
ここにありますが「コミュニティによるまちづくり」というのは、私が申し上げた国連ハビタットの哲学であります。皆さん国連といいますと大体難民という問題、それから困っている人に水を提供したり、食料を提供したり、テントを提供したりというのが国連のイメージだと思うのですが、我々はそういう考え方はできるだけ短期間に収めるということが必要だと思います。というのは例えばテントなんて、配ってみても3カ月で大体みんな捨てるわけですよ。みんな自分たちの恒久住宅を建てたいという希望がありますから。だから援助物資のライフスパン、使える期間というのはとても短いわけであります。もう1つはやっぱり自力再生の能力をつけさせないと、人間というのは立ち上がっていきません。援助をもらう、人から物をもって生活すると、自分で立ち上がる能力を失ってしまうわけです。そういうことから我々は例えば、皆さんから見て左上にあるようなこういう非常に衛生環境の悪いところをどうやって改善するかという場合に、まずコミュニティをモビライズして、モビライズというのはコミュニティをきちんと活動させて、コミュニティの人達に自分たちで改善計画を作らせる。その改善計画を国連ハビタットの専門職員がきちんと見て評価をして修正をして、最終的に地元自治体、国連ハビタット、コミュニティの人たちが合意をすると、そこでコミュニティ・コントラクト、コミュニティ契約という契約を結んで、そこで初めて国連ハビタットが資金と、それから技術を持った専門職員を派遣するわけです。実際に働く人達はコミュニティの人達が自分達で工事をやって、最終的に真中のような生活道路に変えていく。これはもう住宅についてもそうですし、上下水道についても全て同じやり方でプロジェクトをやっています。結果的に例えばアフガニスタンでいうと5万円から10万円くらいの間で60平米の家が建つわけでありまして、コロンボでも3,000ドル、30万円から50万円くらいで住宅1軒建てる。そういうことを可能にしているというのが我々の事業のやり方であります。



これが先ほどから申し上げているスラムの現状、これはバングラディッシュのスラムでありますけれども、こういうものが爆発的に大きくなってきているという状況であります。



これはスマトラの地震、津波の後の状況、それからまたイラクの戦争の後の誤爆の状況、アフガニスタンの紛争の後の状況ですね。スマトラの場合には左側のこういう津波でやられた後、さっき言ったようなコミュニティの人達の力を使って、右のような住宅に変えていくということをやっています。特にスマトラ地震の時は福岡の一般市民の方から 4,000 万円くらいの募金がありました。その募金を使ってスリランカに福岡村という村を作りまして、現在 47 世帯がこの福岡村で暮らしていますけれども、こういった福岡と地元を繋ぐようなこともやっています。



これはパキスタンの地震の後のいわゆる仮設住宅ですね。我々の場合、テントは使わないです。左側の地震で粉砕された後の仮設住宅というのはこういうトタンを使ったような住宅を建てる。なぜかという、これは既に恒久住宅を建てる所に、

非常に簡単に3日もかからないうちにこういう仮設住宅を作るのですけれども、それから1カ月の間にここに持ってきた資材を使って、自分達で恒久住宅を建てさせるということをやるわけです。したがって資源の無駄使いも無くすし、テントを捨てるというようなことも無くなる。そういう非常にエコ的な、生態系にやさしい、環境にやさしいプロジェクトをやろうとしているわけです。

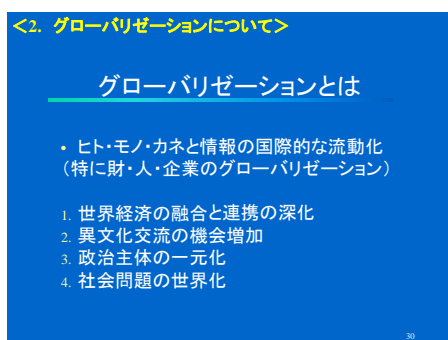
それからこれはイラクの復興であります。私もイラクの戦争が終わった後直ちに現地に入っていますけれども、まあアメリカはピンポイントボンピング、ピンポイントで狙いができるのだ、これは確かに技術的にはそうなのですけれども、ミサイルを撃つのは若い兵士ですよ。当然訓練生も撃つわけで、イラクの中に誤爆が発生していたのは確実であります。私が見た限り、この大学の中にミサイルが着弾していた。そういうものも我々は復興してきたという事例であります。それからこれがアフガニスタンですね。アフガニスタンもやっぱり紛争の後、こういう形で住民自ら自分達の住宅を改善していく、こういうことをやっています。



それからもう1つ重要なプロジェクトで「いのちの水プロジェクト」というのをやっています。やっぱり生活するために水が必要ですから、スラムというのは水のある所にわーっと発生していきますね。結局子どもはこういう泥水の中で泳いでいます。こういうことをやった結果病気になる。特に皆さんこれ私がよく小学校の講演で使う写真ですけども、これ何だかって聞いたら小学生がよく「泥水・池」とか言っていますけどね。これはスラムの人の飲料水ですね。こういうものを飲んでるので、我々は英語で **Water-borne Disease** と言いますが、水に関連した病気（下痢）を発生させるわけですね。これはアフリカの図ですけども、子供は汚れた水を飲んで、最終的にお腹で虫が湧いて下痢を起こして死んでいくということですから、そういう水のプロジェクトをきちんとやらないといけない。「いのちの水プロジェクト」というのも、特にアジア太平洋を中心に盛んに今やっているところでもあります。

以上がざっと国連と国連ハビタットの活動についてご説明をしたわけでありまして、残り30分、先ほど申し上げたグローバルゼーションと日本はどうなるかと

いう話をしたいと思います。



グローバル化というのはここに書いてありますようにヒト・モノ・カネ、情報が国際的に流通することを示しています。日本も戦後は、「カプセル国家」と言っていましたけれども、いろんな規制をかけて、保護政策をとって日本の経済を発展させてきました。ところが関税にしても税金にしても世界の圧力を受けて、既にこのカプセルはもうバリと割れた状態でありまして、日本国家自体も野ざらしになっている。ということは要するに世界の影響をものすごく受けやすい状態になってきているということでもあります。

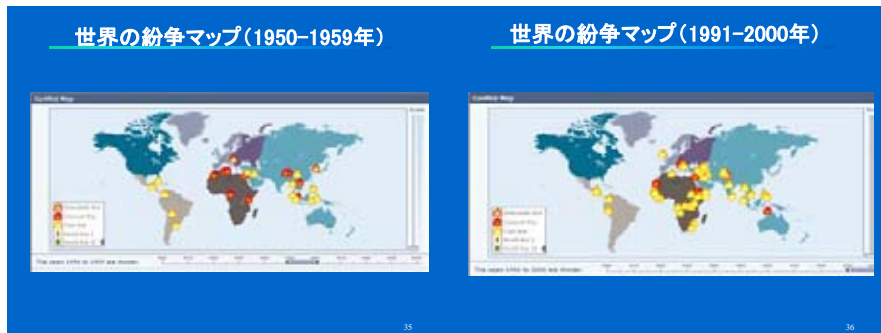
グローバル化については世界史的に見ると、大航海時代から起こってきたということでもあります。言葉としては戦後、特に多国籍企業がいわゆるボーダレス、国境の境界がないという形で企業が企業活動を展開していく中で、グローバル化という用語が定着をしてきたのであります。特に 1990 年代後半から、グローバル化に対しては肯定的に捉える人達、すなわち、自由貿易圏が拡大して、経済が活発化するという意見と、そういうメガコンペティションで小規模の企業はどんどん消滅し、既得権が失われている。したがってグローバル化に対して反抗する勢力、保護政策に再度戻ろうという動きと 2 つあります。だからそういう、グローバル化と反グローバル化の勢力が今ぶつかり合いながら、しかしやっぱりグローバル化は進んでいく。そういう構造になっています。

それから先ほど申し上げた最初に起こったグローバル化の始まりである大航海時代。この時ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、こういう国はいろんな国を植民地化して、現在に至るまでその影響はずっと残っています。皆さんコモンウェルスオリンピックというものをご存じですかね。オリンピックというと 4 年に 1 回世界の国が集まってということですがけれども、いわゆる大英帝国、イギリスが支配をした大体 70 カ国が、未だに 4 年に 1 回、今年もインドだったと思いますけど、コモンウェルスオリンピックというものをやっています。その時

には英国の女王が来て、そこに旧大英帝国の諸国の選手が跪くのですよ。それぐらいイギリスというのは未だに力を持った国でして、1980年代、日本がまだ鼻息が荒かった頃にイギリスなんていうのは斜陽国だと言っていましたけど、世界における影響力は日本と全く違います。日本が何かしてもサポートしてくれる国は多くない。ところがイギリスが国連の中でロビーイングをすると、コモンウェルスは必ずイギリスについていきます。だからイギリスが動くと70カ国動く可能性がある。日本の影響力はそこまで大きくはありません。国際会議に出ている、日本の影響力が十分に指されていないことを感じます。意外とフィリピンなんか話が話し始めるときちゃんと聞くのですよ。というのも、やっぱりフィリピンの後ろにはASEANがきちんとついているので1票じゃないのですよ。だから影響力があるので、経済的には非常に大きな差があるとしても、政治的な影響力というのはフィリピンは強いんです。マレーシアだってとても強いわけでありまして。それが国際的な状況であります。

さらにこの大航海時代の後、第一次世界大戦なんていうのもあったり、その後国際連盟なんていうのが創られたりしてきますけれども、第二次世界大戦が起こってしまったということで、最初に申し上げたように、不戦の願いを込めて国際連合というのは1945年にできたわけです。その後ブレトンウッズ体制、これは経済対策として世界銀行、IMF、それからGATTという組織を創って、非常にダイナミックな経済復興をやろうとした。それからヨーロッパでは盛んに公共投資をやってマーシャルプランという形で経済復興をやってきたし、日本においては有名なマッカーサーが憲法まで創案して日本の構造を完璧に変えてしまったというのが、特に第二次世界大戦後の動きであります。

第二次世界大戦後一番やっぱり注目しないといけないのはこの一番下にあるNATO北大西洋条約機構。戦勝国の中でもいわゆる西側、アメリカ、イギリス、アングロサクソンを中心とした自由主義体制と、ソビエトを中心とする社会主義体制が出来上がって冷戦が発生したということなのです。この頃まだ皆さん生まれていないですよ。1989年にそういう冷戦が崩壊するという大事件が起こりまして、ちょうど私その時ジュネーブにいたのです。皆さんはまだ生まれていなかった時代ですけども、冷戦の最中というのはやはり核爆弾の問題とかということで米ソの間でいろんな話し合いがもたれて、戦争しないようになんとか動いてきた。そういう中でソビエトブロックがドンと潰れたものですから、当然残ったアメリカが世界の警察的に治安を維持するという状況になってきた。少なくとも日本の人はそういう東西冷戦の終焉、東西冷戦が終わったということを非常に、喜んだ。これで平和になるよと思ったのでしょ。



でも実際はどうかということでありまして、これは1950年から1959年、特に第二次世界大戦直後の世界の紛争マップであります。特に植民地から独立をしようというような戦争がかなり起こりましたので、独立戦争が中心で紛争が起こっているのです。これと1990年以降の紛争の状態を比べてみましょう。どうでしょうか。これが1950年代。これが1990年代。確実に増えていますよね。ということは冷戦が終わって実は世界が非常に不安定化したというのが実態であります。現在、世界212カ国のうち80カ国でなにがしかの紛争の種があるとされています。それは民族問題であったり、宗教戦争であったり、そういうことが212カ国中の80カ国で起っているわけですから、世界の40%は紛争の火種を持っている。そういう非常に不安定な中で皆さんは生きておられるということでもあります。特に1990年から2000年、アメリカが世界の警察として、世界政治を動かしてきたわけです。それに対して確実に反発した勢力がいるわけです。それはご存じのようにここに書いてあります2001年9月11日のアメリカ同時多発テロで、ニューヨークの世界貿易センタービルに2機の767が突入したわけです。その後アフガン戦争が発生し、その後はイラク戦争が発生し、ということで、アメリカの世界の警察としての活動に対してイスラム世界が強く反発を起こして、アルカイダを中心とする世界のテログループが西側の勢力と戦いを起こしてきているというのがひとつの不安定化の要因でもあります。アメリカという国は自国内で何か問題が起こると、国民の目を海外に向けて国内を統一していくという政治システムをずっと使ってきた国なのです。したがって次はイランか北朝鮮か、なんていうことを言う人もいますけれども、その他に中東のパレスチナだってそうですし、ソマリアだってモザンビークだってスリランカだって、もうそこら中に戦争の火種はあって、そういう所に、イラクですとかアフガンでやっているように、米国の場合には米軍を派遣して、なんとか世界の警察としての力を維持しようというような動きが未だにあるわけです。しかし、アメリカもそこまでは力を使えなくなってきた、スーパーパワーではなくなってきたという状況が如実に出てきています。

新興国の台頭

- ⇒ BRICs (ブラジル、ロシア、インド、中国)
- ⇒ 歴史は繰り返す: 1500年代のインド・中国のGDPは世界の50%を超えていた
- ⇒ 東アジアの不安定性

38

それは例えばここにありますような新興国の台頭です。BRICsと言っていますが、ブラジル、ロシア、インド、中国。ロシアなんかはソビエト連邦が崩壊したといっても、やはり石油が出ますからね。ロシアの石油の生産量というのはサウジアラビアに次いで第2位だと思います。それくらい石油が出る国ですから非常に豊かなのです。私が冷戦の直後にモスクワに行った時には本当にもうパンもないような町でしたけど、今は一挙に回復していますね。それからインド、中国。ここだってもう経済的には急速に成長しているわけでありまして、本当に歴史は繰り返すということではないですけれども、1500年ごろの世界のGDPの50%はインドと中国で生産されていたと言われていています。まさに今そういう状況が出てきているわけでありまして。

そうした中で昨今の事例のように、中国は着実に領土問題として尖閣列島という所に手を伸ばしてきているわけでありまして、そこに間髪いれずにロシアは北方領土に手をかけているわけですね。これはもう私が本当に最初に申し上げたように、1979年くらいから日本政府の中で盛んに議論をしてきて、今のうちに尖閣列島と北方領土問題についてきちんと手当てをしないと、将来大きな問題になるというようなことを議論していたわけです。まあプアーポリティックスと言うか、やっぱり政治的決断もなく、今日に至って現状のような問題が発生しているということでもあります。東アジアについても非常に不安定化をしていくということで、こういうものをどうやって外交上回避していくかという問題がこれからの非常に大きな日本の課題になっているということでもあります。

「世界は多極化する、不安定化する」。これは鴨武彦という国際政治学者、東京大学の教授でもう亡くなりましたけれども、彼は1990年頃にした本の中に、アメリカの一極軍事支配というというシナリオと多極化という2つのシナリオを書いていますけど、これ両方とも当たっていますね。まずはアメリカが一極支配をして、その後どんどん多極化している。それから1992年にハンチントン、ハーバードの教授でありますけれども、彼が「文明の衝突」という本を書いています。世界は8

つの文明で構成をされていて、やがてその文明同士が衝突を起こしていくだろう。まさに今そうですね。イスラム文明といわゆるクリスチャン、こういう文明の間で非常に厳しい摩擦が発生しているというわけです。ハンチントンが、彼が書いた1992年、日本はどのカテゴリーにも当てはまらないので1992年地点では日本文明として認めると言うことを言っています。したがって8大文明だと。しかしながら日本文明はおそらく中華文明に吸収されるであろうということを書いていて、将来的には7大文明の衝突だと書いていますが、皆さんこれをどう受け止めますか。

それから皆さん首脳会議の状況を見ても、1975年に初めて、日本を含めたG5サミットが開催され、1986年にカナダとイタリアが入ってきてG7になっていった。1998年にはロシアが入ってきてG8になりました。今やG20でしょ。すなわち、例えば国際通貨対策でありますとか、国際政治の問題についてもものを決めようと思ったら、もうG5なんかじゃとても決まらないわけですね。アメリカもとてもスーパーパワーとは言えない。G20まで拡大して合意を取らないと、国際政治というのは動かさなくなっている。ここで日本がどれだけインニシアチブを取れるかということですね。日本の国際政治、日本人の基本的な力、こういうものがこれから試される時代に入ってきているということでもあります。

経済の話をしてしますと新興国、例えばメルコスールといった、南米の経済共同体でありますとか、ASEANを中心とする経済成長でありますとか、そういう経済圏が北米経済、EU経済とも非常に緊密に結びついたグローバリゼーションが今起きている。先ほど申し上げたように日本ももうカプセルが完全に割れてしまったので、例えば1997年にアジア通貨危機というのが韓国のウォンの下落で始まって、一挙に日本を含むアジア経済に波及していくということでもあります。それからリーマンショック、2008年にアメリカで低利の住宅ローンをはじめとする経済危機が発生したわけですが、これも一挙に世界中に影響を及ぼす。それくらいもう世界は緊密化をしていて、特にリーマンショックの場合には日本はなかなかここから立ち直れない。未だに景気は低迷を続けているというような状況にあるわけです。

こういう国際経済の話については今のような非常にグローバリゼーション、インターラクティブな考え方と共に、クリエイティブ経済という考え方が重要になっています。これは少し皆さん高校1年生2年生にとっては早いかもしれませんが、私は大学で空間経済学とか、クリエイティブ経済ということを学生に教えています。何か物を作って生産をしていく経済から、だんだん技術力や人材力、テクノロジーや芸術、そういう知的な活動を中心とした経済が、世界のGDPの多くを占めていくのではないかと、国際経済の考え方が変わってきています。その場合にではどう

なるかということなのですが、例えばコミュニケーション、情報システムは非常に進んで、インターネットにしる電話にしる、通信システムは進んできた時に、学者は世界はフラット化する、どこにいても仕事ができるようになるので何も一極集中しなくていいのだと言ってきました。だから非常に分散的な世界が訪れますよと予測したのですが、現実の姿として、そういうフラット化する状況は全く見られないです。特にクリエイティブ経済学については、リチャード・フロリダという学者が盛んに研究をしているわけですが、彼はスパイキーという言葉を使っています。スパイキーというのは非常に山谷がデコボコしているという意味なのですが、世界の中に非常に大きな格差、伸びる所と伸びない所とはっきり分かれてくるのですよと言っています。彼は特にこれを人工衛星から地球の写真を取りながら、特に光を中心として推計しているわけですが、世界は40のメガ地域にほぼ経済的には集約をされていくのではないかと彼は言っています。この40のメガ地域の人口はたかだか18%占めるだけであります。そこに66%のGDP、特にイノベーション、例えば特許の数などは86%が集中し、トップクラスの科学者は83%までがそういったメガ地域に集中をしているということですから、世界は非常に巨大な格差世界になっていくのだらうということになります。

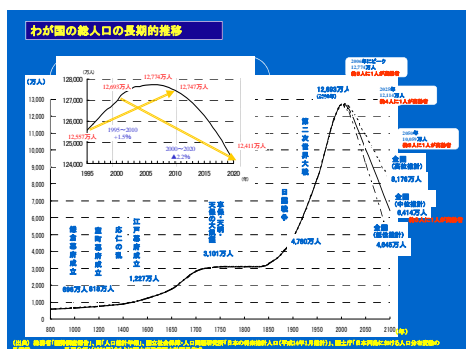


これは北米のメガ地域の事例。それからこれはヨーロッパのメガ地域の事例。ではアジアはどうか、日本はどうかということですね。幸運なことにですね、



まあ当然関東、大阪というのは入っていますが、もうひとつ札幌都市圏と、福岡を中心とする九州北部については40のメガ地域の1つにカウンティングされています。私は国土政策をやっている人間ですが、私としてはぜひとも日本

にもがんばってもらいたい、この九州北部にも頑張ってもらいたいと思っているわけです。



最後に日本はどうかという話をしておきたいと思います。これは皆さん何のグラフと思われますか。これは我が国の総人口の長期的推移であります。800年くらいに大体600万人位であった人口が徐々に上昇して、江戸の間に開墾とかして食糧が増産され人口が増加しました。食料を中心として推計をすると大体3,000万人くらいで、人口はずっと停止をしてきた。250年間くらい続いてきたみたいであります。明治維新後急速に近代化が進み、産業革命が起こって、生産性が高まると同時に、人口も一気に100年間の間に上昇するわけであります。この間、第二次世界大戦直後に人口的にはふらつた時期がありますが、このぐらいのグラフにするとそれはわかりません。基本的なトレンドとして、明治維新以降急速に日本は伸びた。一般的には日露戦争に勝った1904年以降、初めて日本は世界的に一流国の仲間入りをしたと言われているわけなのです。その後第二次世界大戦の大敗を喫して、また1からやり直した。ところが既に日本の人口は2006年に1億2774万人でピークアウトしてしまいました。この後日本の人口というのは急速に減少していきます。2050年には大体1億を切って9,000万台になる。今世紀末には6,000万、人口が半分になるということです。したがって単純に、人口×GDP per capitaということを考えてみると、日本の経済は半分になるということです。私は1953年生まれでありますけれども、私は日本の高度経済成長と共に、日本は世界的には経済としては立派な国だと言われる間に生きてきたわけでありますけれども、2050年例えば人口が9,000万になる時に皆さんは今18歳ですから、その時には58歳になるのかな。まさに日本の中枢部を皆さんが牛耳っていくその時というのは、日本は経済的にはトップクラスの国ではなくなってしまうわけです。なかなかそういう数字が出せないのですが、例えばこれはゴールドマンサックスが推計している2050年のGDPランキングですけれども、見てください。日本は8位ですよ。これはまだいい方です。他の推計なんか見ていると韓国にも抜かれるという推計もあります。ですから私たちが生きてきた時代というのは高度成長と共に、これは国際的にも活動し、日本の経済界も海外で活動してきたわけですが、皆さんが生きていく

時代は右肩下がりの、日本の経済が縮小していく中で、世界で生き抜いていかないといけない。特に日本の経済の活動も当然小さくなっていく中で生きていかないといけない。そうすると現在あるいろんな企業ですとか経済活動は共々食い合う世界になってきていますから、日本の中もとても厳しい状態になってくるわけです。やはり新しいパイを求めて皆さんも海外に当然飛び出して、海外の経済活動の中で生き抜いていかないといけないということが確実に発生してくるということです。特に我々の時代と比較して、経済が伸びていく、日本が伸びていく時代に海外で我々は活躍をしたわけですが、皆さんの場合には日本経済が縮小していく中で海外と戦っていかなければならないということでもありますから、その現状の厳しさたるや、想像を絶すると私は思いますね。海外で生き抜いていくためには語学力は当然のこと、力強いタフネスが要求をされるわけでもあります。

大分時間がなくなってまいりました。福岡の話を少しだけしますと、私は福岡が大好き人間なのです。最近福岡は世界的に非常に注目されています。例えばこの2006年のニューズウィーク、最も世界でダイナミックな都市10都市の中にも選ばれていますし、2008年これはイギリスのモノクルのLivable City、最も住みやすい都市トップ25の中に福岡は入ってきています。これは2008年の刷りですが2009年は福岡14位まで登ってきていますね。もう少し私は上に行くのではないかと思っています。

皆さんの場合には、今言ったような非常に厳しい世界のグローバリゼーションの戦いの中で、なおかつ日本が右肩下がりで経済が落ちていく中で、世界との交渉をしたり、世界の経済活動の中で生き抜いていかなければいけないということでもあります。その中で本当に何が必要かということですね。私はそういう時こそあまり経済経済と言ってはいかんと 생각합니다。日本人というのは本当にどういう基本的な精神中枢を持っているのかということがとても重要であり、それが世界から問われる時代に入ってきたと思います。国際連盟の事務局次長までやった新渡戸稲造が「武士道」という本を書いています。昔は5000円札にも国際人の象徴として載った人ですね。彼が言っている日本人が長い歴史の中で培ってきた精神的な「仁」とか「義」とか、「礼」とか、そういうようなものが、明治時代に世界の各国から日本人が非常に信用されるひとつの精神的なバックボーンだったわけですね。ところが戦後の日本というのは、そういう日本の精神中枢をどんどん経済至上主義にして、失っていった過程であります。これから日本の経済がもし縮小していく中で皆さんが生き抜いていくとすると、やはり私はそういう時こそ経済だけに目を向けるのではなくて「やっぱり日本人とつき合っているといいことがあるね、彼らは信用できるね」という精神中枢を持った人達が、きっと世界の中で生き残っていけるのだろうと

思っています。皆さんの場合には今 1 学年 400 人くらい？その中で福岡に残るのは大体 3 分の 1 くらいで、残りの 3 分の 2 は東京へ行ったり、世界で活躍をするということになるのでありますから、福岡に残る人もそうでありますけれども、そうやって世界で活躍をし、東京で活躍をする人たちは、やはり今申し上げたような立派な精神的なバックボーン、本来日本人とは一体なんなのかということをよく考えてもらいたい。皆さんはこれからの厳しい 21 世紀を、日本を背負って立つ人間になっていくわけでありますから、日本は何なのかということをよく考えて、日本民族いかにあるべきか、という事を考えながら、日本の威厳と、世界から尊厳できる日本を創っていけるようなことに貢献していってくださいと申し上げて、時間が参りましたので、私の講演についてはこれで終了させていただきたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。